

統一したユマニチュードケアの提供  
～更なる技術向上を目指して～

共同研究者 小松栄一・丹野弘和  
山川由美・伊藤尚美

【目的】知覚・感覚・言語によるコミュニケーションに基づいたコミュニケーション技法である「ユマニチュード」を参考にし、介護技術の習得の深化・認知症ケアの更なる技術の向上・症状の異なる対象者への統一したケアの提供を目指した

【対象】BPSDの異なる入所者3名

【期間】平成29年7月17日～9月30日

【方法】1)フロア全体でユマニチュードのおさらいを実施 2)フロアで話し合いを行い、対象者を決定 3)取り組みの実施(対象者のノートを作成し、日々の状況を全体で把握できるようにする) 4)職員アンケートの実施①I・K様(男性)アルツハイマー型認知症 BPSD:帰宅願望・短期記憶障害・介護抵抗・環境の変化で興奮②K・F様(女性)脳梗塞にて失語症あり BPSD:失語症によるストレスあり、排泄介助拒否(暴れたり、うなって訴える) ③S・H様(女性)アルツハイマー型認知症 BPSD:短期記憶障害・帰宅願望・声だし・弄便行為

【結果】①I・K様 実施前:帰宅願望が始まると表情が硬く険しくなり、意思疎通困難となり、拒食・拒薬がみられ、廊下を徘徊、廊下に座り込む。実施後:表情が和らぎ、目線を合わせて会話ができることで食事・内服がスムーズに出来、徘徊の軽減に繋がった。②K・F様 実施前:表情が険しく硬い・誘導の拒否・机・床を叩く等の介助の拒否が強い。実施後:表情が目線を合わせられるようになる・介護拒否時は時間をずらして誘導したことにより誘導拒否が軽減され、机・車椅子叩きも減り、介助拒否が軽減された。③S・H様 実施前:幻視・妄想が認められ、不快な訴え・帰宅願望が強く、大きな声出しに繋がる。実施後:スタッフが傍にいる時間が増え、訴えの軽減・不穏でいる時間の軽減に繋がり声出しが軽減した。

【考察】強制ケアをゼロにすることを目指し、ケアに入ることを心掛けていた為、スタッフ自身が気持ちに余裕を持って利用者様と接することができ、統一したケアの提供ができたスタッフが多く、BPSDの緩和に繋がったと考えられる。利用者様が気持ちよくケアを受け入れるタイミングを見極める力が付き、その日の気分や体調の変化に気付けるようになってきたが、様々なBPSDを抱える利用者様がいる中で、落ち着いて対応できるようになったスタッフもいるが、介助拒否の強い利用者様には苦手意識を感じるスタッフもいる。利用者様が気持ちよくケアを受け入れるタイミングを見極める力が付き、その日の気分や体調等の変化の気づけることにより、より安心して生活できる環境の提供へも繋がったと考える。